

情報共有

(2枚)

非機密メモ

NISA班←フルス対応 12/29 16:10 破壊

東京電力株式会社

暫定版

取扱不可

### プラント状況（本店レク）議事メモ

日時：平成 23 年 12 月 29 日（木）11:00～11:15

場所：東京電力本館 3 階大会議室

先方：記者約 10 名（カメラ 3 台）

当方：原子力・立地本部 [REDACTED]

原子力設備管理部 [REDACTED]

広報部 [REDACTED]

配付資料：なし

#### [REDACTED] よりプラント状況について説明

質疑：

Q. 本日発生したピンホールについて、漏えい箇所はどこか。

A. 貯蔵タンクエリアのホースからである。現在、詳しい漏えい箇所や漏えい量を調査している。

Q. 漏えいしたのは屋外か。

A. その通り。

Q. 穴が開いた原因是、以前と同様、枯れた雑草によるものか。

A. 原因については、現在調査中。

Q. 漏えい水の種類は濃縮塩水か。

A. 淡水か濃縮塩水かについては確認中。

Q. 漏えいした水のストロンチウム等の濃度はどの程度と予想されるのか。

A. 淡水の場合はセシウムもストロンチウムも低減できており  $10^1 \sim 10^2$  程度、濃縮塩水の場合は  $10^4 \sim 10^5$  程度かと思われる。

Q. 漏えいした水は R O 装置を通した後のものか。

A. その通り。R O 装置を通した後の淡水側の処理水は低濃度であるが、廃液側の水はストロンチウムの濃度が高い。

Q. 漏えいは止まっているのか。

A. 止水工事を並行して行っているはずであるが、現時点では漏えいは続いているかと思われる。

Q. 定例のパトロールで気づいたのか。

A. 毎日行っている定例のパトロールで発見したのかと思われるが、確認する。

Q. 一部報道で、福島第一原子力発電所において平成 3 年頃に非常用 D G が水没した

ということだが、詳細を教えていただきたい。

A. 確認する。

Q. 格納容器の温度について、昨日より上がっているが、何か新たにわかつたことはあるのか。

A. 最高温度は 28 日 18 時時点で約 54.6 度であったが、28 日昼過ぎに窒素封入を実施しているなか、29 日 10 時時点まで 52.3 度まで下降した。緩やかな温度上昇が確認されている他の 2箇所の HVHにおいても、29 日 1 時に最高温度 39.2 度を確認したが、その後安定している状況。経過観察をしてまいりたい。

Q. 他の 2 点が上がったのはいつから温度上昇しているのか。

A. 27 日午後から。温度の上がり方の傾向としては異なっている。

Q. 当初の 1 カ所と他の 2 カ所の HVH の位置関係は。

A. 平面上の位置については確認する。

以 上

情報共有

(5枚 非管理用)

東京電力株式会社

NISA非←プレ対応

12/29 22:00 / 岩井

報道 開示

暫定版

プラント状況(本店レク)議事メモ

日時：平成23年12月29日（木）18:00～19:00

場所：東京電力本館3階大会議室

先方：記者14名（カメラ3台）

当方：原子力・立地本部

原子力設備管理部

広報部

配付資料：

- 福島第一原子力発電所の状況
- <参考配布>福島第二原子力発電所1号機 線量当量率の測定結果について
- <参考配布>福島第一原子力発電所 ろ過水の漏洩状況について

[REDACTED]よりプラント状況について説明

質疑：

Q. 平成3年の1号機非常用D/Gへの浸水事象について、補機冷却系配管から海水が漏れたことにより冷却が困難となったために原子炉を停止したのか。

A. 補機冷却系は原子炉内の熱を海水に捨てる機能があるため、漏えいが継続することにより冷却が出来なくなることから原子炉の停止を判断した。

Q. 補機冷却系とはRHRの海水系なのか。

A. 直接RHRを冷やしている海水系であり、また、モーター等の関連設備の冷却にも使用されている。

Q. 冷温停止までは2～3日かかると思われるが、その間ずっと海水は漏れていたのか。

A. 原子炉は4時間程度で冷温停止しており、その後、ポンプを停止した。

Q. 1号機原子炉格納容器内の温度計について、昨日から温度上昇が見られる2箇所はどこにあるのか。

A. 温度計の2箇所は原子炉格納容器の北側のポイントである。12月27日から温度の上昇傾向が確認されているが、顕著に上昇しているのは昨日の夜から本日午前中にかけてである。しかし、外気温が-2℃から8℃まで変化しており、当該の温度計以外に逃し安全弁付近の温度も上昇傾向であることから、外気温の影響もあるのではないかと考えている。その点を加味して今後温度の傾向を監視して行きたい。

Q. 外気温がどのように影響を及ぼすのか。

A. 格納容器内に封入している窒素は、屋外にある窒素供給装置から配管を通じて供給されているため、外気温と同程度の温度で封入されている。また、今のところはつきりと分かっていないが、原子炉建屋も大物搬入口が開いているため、外気温や気圧が格納容器内部の気体の状況へ影響を与えている可能性も考えられる。

Q. 温度上昇の原因として、注水している水の損傷燃料へのあたり方が変わるものなどして、熱源の状況が変化した可能性も考えられるのか。

A. 注水量や原子炉圧力容器底部の温度に大きな変動がないこと、1号機格納容器底部は床面から30cm程度水位があることから、熱源に変化はないものと考えている。しばらくは現在の格納容器の窒素封入量およびPCVガス管理システムの窒素抽気量、原子炉への注水量を維持しての温度変化を見ていくが、格納容器の温度が上昇するようなことがあれば原子炉への注水量を増やす等の対応を検討しているところである。

Q. 平成3年の1号機非常用D/Gへの浸水事象について、配電盤まで浸水したのか。

A. 浸水したのは、電動駆動の給水ポンプ、ディーゼル発電機室であるが詳細は確認させていただく。電線管を伝って広範囲になったと記憶している。

Q. 浸水したのは非常用D/Gの基礎部だけか。

A. 漏れた水が、床面にたまつて浸水した状況。

Q. 非常用D/Gの電源としての機能はなくなったのか。

A. 使える状況であった。

Q. どのような対策をとられたのか。

A. 腐食により数センチ四方の穴が開いたため、内面に防食剤を塗る対応をした。また、地下に埋設した配管のため、点検が困難であった。そのため、配管を移設して目視点検できるようにした。

Q. 非常用D/Gがある部屋への止水対策もしたのか。

A. 非常用D/Gに必要である空気ルーバーから浸水するような事象は今回の事故の教訓として把握した。平成3年の事象は埋設配管となっている箇所の点検をどうするかが重要なポイントであったので、その対策を行ったもの。

Q. ルーバーの高さはどのくらいか。

A. 床面から数メートル程度。

Q. 非常用D/Gの基礎部はどのくらいの高さになるのか。

A. 浸水量と含めて確認する。

Q. ろ過水の水漏れは、草が刺されたことによるものか。

A. チガヤによるピンホールと考えている。下から草が上向きに突き刺されたあと、何かの原因でホースが動いて上から刺されているように見えているものと思われる。

Q. 漏えい量はどのくらいか。

A. 評価できていない。なお、漏れた水はろ過水である。

- Q. 原子炉格納容器の温度が窒素の封入および排気によって変化するものなのかな。
- A. 原子炉格納容器への封入と PCV ガス管理システムからの抽気は、水の放射性分解により発生する水素を補うために行っており、冷却効果を求めているものではない。しかし、原子炉格納容器内の気相部の気流が変わると局所的な温度分布に変化が起こり、温度計により検知されたのではないかと考えている。
- Q. 現在の温度状況は、既に静定したと考えているのか。
- A. 下がり傾向になっているが、一日程度しかたっていないため、しばらくは窒素封入量や抽気量、原子炉注水量について操作は行わずに温度変化を監視したいと考えている。
- Q. S R 弁の排気温度は、原子炉格納容器の温度と直接関係ないと考えて良いのか。
- A. 当該温度計は逃がし安全弁から圧力抑制室への排気管の途中にあり、S R 弁から蒸気が漏れていなか検知するために設置されている。現在、蒸気の流れがないが、その周辺の温度が計測できていると考えている。1号機はほとんどの損傷燃料は原子炉格納容器内に燃料があると考えているが、2, 3号機は原子炉内の燃料に近い箇所の温度が計測できていると考えている。また、注水量の変更に伴い蒸気量が変化した場合、当該温度計で計測される温度が変化する場合もある。
- Q. 燃料の状態がわかっていないことが、今回のような温度上昇に結び付いたのではないか。
- A. 燃料の状況がわかっていないことに直接結びつかないと考えている。熱源は圧力容器底部およびペデスタルにほとんどあると考えており、循環注水冷却で冷却できている。今回、窒素の封入および抽気量を変えると格納容器内気相部の気体の流れが変わるという知見が得られた。
- Q. 廃炉に向けたロードマップにおける原子炉建屋内の除染は、2012 年度中に着手するのか。
- A. 廃炉に向けて原子炉建屋内での作業が大きく占めるため、現在、遠隔操作による技術の開発を検討しているが、建屋内に作業員が入って作業することも考えられる。そのため、いかに除染して作業員が入れるようにするかがポイントとなるため、高圧ジェットなどで洗い流す方が良いのか、また、その際に発生する廃液をどう処理するかなど検討している。
- Q. ろ過水タンクからの漏えい原因であるチガヤの予防策はあるのか。
- A. 現在、当社の技術開発研究所でホースに与える影響を研究中である。具体的な対策はまだできていない。ポリエチレン管へ交換することで対応できるのではないかと考えている。
- Q. 月に一度ロードマップの見直しをしてきたが、廃炉に関する中長期ロードマップの進捗状況の公表について、どのように考えているのか。
- A. 中長期対策会議や、政府・東電等による運営・研究会議が月一回程度ある。その際の資料等は公表してまいりたい。

Q. 今年最後の会見ということで、正月に自宅で住めないかたへのコメントをいただきたい。

A. 福島県、社会の皆さんにご心配、ご迷惑をおかけし、お詫びさせていただく。ステップ2の達成ということで、原子炉は安定した状態となつた。引き続き安定状態を維持し、廃炉へ向けた取り組みを着実に進めてまいりたい。

Q. 平成3年に1号機で発生した埋設配管からの漏えいについて、どの部分から腐食が発生したのか。また、この事故については公表しているのか。さらに、対策として配管を見るようにしたとのことだが、非常用D/Gそのものを地上に上げることは検討しなかったのか。

A. 原子炉建屋南側にある電動駆動給水ポンプの床面付近から漏えいした。本件については事象が発生した同日10月30日に公表している。あわせて原子力安全・保安院へも報告している。

再発防止対策としては埋設配管の腐食事象であったため、配管内面のライニングを変更した。また、コンクリート内に埋設されていて定期点検が困難であるため、建屋内を通すように引き直した。

また、非常用D/Gは地震が発生した時にも稼働することを要求している安全上重要な設備であり、地下の重心の低い箇所に設置し耐震対策を重視していた。

Q. 自由化部門の料金値上げについて、38,000人の社員のボーナスを出していて良しとしているのか。

A. 当社のおかれている経営環境を踏まえ、年収ベースでの減額を行っている。一般職では20%、管理職では25%の減額を実施している。

Q. ボーナスを0円にして、月収を減らせば国民感情も和らぐのではないか。

A. ご意見はあるかと思うが、月収、賞与あわせて減額させていただいている。

Q. 料金値上げに関する苦情や抗議の数は集計しないのか。

A. していない。

Q. 枝野大臣に料金値上げは国民の信頼回復とセットだと言われているが、信頼を回復するためにどのようなことを考えているのか。

A. 大臣の意見も含め、検討していく。

Q. チガヤによるピンホール事象はこれまで何件ぐらい発生しているのか。

A. 特段数えていない。2桁程度はあると思っている。

Q. これまで [ ] が会見を継続してきたのは使命感からか。

A. 4月1日から広報の担当をしている。役目として何とかやってきた。十分お伝えできない点もあったかと思うが、精一杯やってきた。

Q. 年末年始は会見が休みとなったが安心しているのか。

A. 年末年始についてはトラブルがあれば会見をやるケースもある。

ステップ2が完了し、原子炉の冷温停止状態を確実に維持できるようになったことは、3月の厳しい状況からよく来たと考えている。安心するのではなく、引き続き冷温停止状態を維持していくことが重要であると考えている。

Q. 会長、社長が辞任するのはいつか。他の役員も辞めるのか。

A. 総合特別事業計画の中で検討していく。

以 上